

寛文八年七月六日 御印

六 人形廻・踊子等宿貸申間敷儀 御定

覺

一、最前如被仰出、人形廻・をどり子等、一宿に而茂借置申間敷事。

一、他國之座頭・舞々等、無故もの宿かし申間敷事。

一、跡々より不有來異形之諸勸進、御停止候條、左様之者に宿かし申間敷事。

右被仰出之通堅可被申付者也。

辰七月廿二日

七 百姓公事沙汰之儀御定

覺

一、御領國中百姓中其外遊民、公事沙汰に付目安之儀者、如先規、其組十村添替を以、郡奉行迄可上之。縦令直に言上仕度儀有之といふとも、自今以後者村肝煎・十村肝煎迄

書付可出之。但、肝煎手前之儀於申上者、郡奉行・改作奉行迄書付出すべし。右兩奉行事訴においては、算用場奉行に可申上。算用場之者共に對し申上品有之者、大目付迄書付可出之。

右役人差置、直に訴狀等上之においては、不及理非急度可被行曲事旨、所被仰出也。

戌八月廿八日

八 絹・紬・布・木綿長幅之儀御定

覺

一、絹・紬之儀、一端に付、大工のかねに而たけ三丈四尺、はゞ一尺四寸たるべき事。

一、布・木綿之儀、一端に付かねにてたけ三丈四尺、はゞ一尺三寸たるべき事。

右之通、此以前より被相定之所、近年みだりに有之間、向後書面之寸尺より不足に織出す輩於有之者、可爲曲事。來已年秋中より改之、不足分見出次第可取之間、諸國在々所々において可存其旨者也。

辰七月十三日

九 破損舟荷物揚賃之儀御定

覺

一、於御領分浦方、御國・他國舟共に破損之刻、公儀如御定、荷物取揚候者、依其品、或十歩一或二十歩一可請取候事。

一、御自分御用之御荷物積候舟破損揚賃、自今以後如件可被下之。手舟并人足出申節、半日に而事濟候共、一日之日用銀可被下之事。

一、公儀御舟は不及申、諸大名衆舟破損之砌者可及馳走。上乘又者船頭方より、如御定揚賃於相渡者、無辭退可請取候。若不渡之候共、從此方は申斷間敷候。於然者、從御自分可被下候間、如前々各被聞届、其上を以荷物揚賃等請取候様、可有裁許事。

戌七月十一日

一〇 走り百姓之儀御定

御郡中百姓并頭振によらず、走り他國に罷越者、有所承届申上候者、御褒美可被下候。在り所知れ候はゞ、其所に被仰出、走り百姓可被召返、一類之もの共より呼返候はゞ、御赦免被成、如跡々田地可被仰付事。

一、百姓走り可申鉢見聞候はゞ、早々村肝煎・組合頭に申聞、押置可申候。若押置事難成候者、近所之村肝煎に申聞、近郷之者罷出押可申候。たとへはしり可申旨申合候ものに而茂、其趣申あらはし候はゞ、御褒美可被下候。走り百姓有之旨申斷候所、村肝煎不罷出候はゞ、急度曲言に可被仰付事。

一、御領分之外、他國所々商賣塩入申間敷候。勿論御國ものたりといふとも、他所之塩買入申間敷事。右之通急度可被申觸候。以上。

七月三日